

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

- 「日本大会概要」 - 地球市民としての議論の展開を-
- 特集ザ・インタビュー - セコム株式会社 取締役最高顧問 飯田亮氏-
- UIFA第12回日本大会への参加
 - 「環境共生時代」=「エコロジー的危機の時代」の都市・建築・空間
 - UIFAの行方
 - 人と人が共生する住まい
- バンコックにて (2)
- ドキュメント6 - 第12回UIFA日本大会に向けて- (1997年11月12日~1997年12月20日)

■「日本大会概要」 - 地球市民としての議論の展開を-

さてNEWSLETTER No.27号新年第1号は、'98年UIFA国際女性建築家会議の大会概要の紹介で幕を開けます。

9月1日(火)メイン会場NYCで登録を済ませた参加者は、歓迎パーティ会場の都庁都民広場に集合。2年ぶりの再会や都庁見学、展望台からの眺望で巨大都市東京を実感してもらいます。

9月2日(水)NYCで開会式。発表、討論のプログラムが始まります。第1のメインテーマは「人と環境」。人と自然、人と社会環境の関わり、環境負荷と生活様式、教育、女性建築家の活動、子どもの生活環境、余暇の環境、建築家の役割など。

新宿パークタワーギャラリー2では作品の展示が行われます。

夜はNYCでオープニングパーティ。広い出会いの時です。

9月3日(木)第2メインテーマは「建築と環境」。建築と自然環境、社会環境と建築など建築家の対応も含めての発表、討論。そして午後は、野帳をもってスタディツアへ。

夜は展示会場で作品を拝見しながら展示オープニング。

9月4日(金)第3メインテーマは「都市と環境」。災害と都市市民とコミュニティー、地域特性と環境などの都市のあり方を発表、議論。そして午後は再び野帳をもってスタディツアへ。

9月5日(土)横浜市、建築学会と共催でランドマークホールにて「明日のすまいとまちを考える-日本から世界へ」と題し市民公開シンポジウム。午前中のスタディツアは横浜のウォーターフロント、みなとみらい21。

9月6日(日)閉会式、次回開催国の提案と公式プログラムを済ませ、ちょっとリラックスして東京湾・隅田川クルーズ。最後は清澄公園で、庭園と茶道を楽しみながらおわかれパーティです。

9月7日(月)エクスカージョンは都内建築めぐりあるいは、横浜三溪園・鎌倉のいずれかのコースを参加者の選択で。

9月8日~12日(火~土)ポストコングレスツアは京都、奈良、神戸。神戸での国際交流会も計画されています。

さて盛り沢山の企画の内容、準備にどの部門もてんてこ舞いです。

UIFA JAPONのメンバーは全員なんらかの形で参加してほしい。展示・発表・討論への参加、ツア、ホームステイなどのお世話、協賛や広告による支援確保など、まだまだ沢山の仕事があります。実行委員会のメンバーは皆自身の仕事の大変な忙しさの中で時間のやりくりをしています。まだ参加の余地は山ほど。

そして、メインテーマにそってどれほどこの会議を社会性のあるものにできるか。都市や建築や社会のあり方を展望し私達に何ができるかを問い直す大会にすることができるか。最大の議題が残されています。

ニュースレターの取材や後援、共催のお願いに行く先々での期待と励ましに大きな責任を感じる日々。

21世紀を地球市民として担う議論を展開したいものです。

(渡辺喜代美)

■プレス発表の報告

2nd. サーキュラの印刷が上がった1月28日(木)プレス発表が行われました。時事通信、日刊建設工業新聞、建設新聞、月刊建設産業新聞、日刊建設通信新聞、神奈川新聞、日経アーキテクチャ、新建築、室内から11名の記者の方々のご参集。小川副会長、松川実行委員長出席。そして飯島広報理事の司会で質疑も熱心かつ活発に行われました。「日本の建築士の女性の占める割合は」「開催地や開催日程はどう決めるのか」「テーマの決め方は」等。(田中厚子)



特集ザ・インタビュー —セコム株式会社 取締役最高顧問 飯田亮氏—

UIFA第12回日本大会を支援して下さる方々をお訪ねするインタビュー・シリーズ、第3回目は、新春インタビューとして、セコム株式会社の創業者であり現在は取締役最高顧問でおられる飯田亮氏にお話を伺いました。新宿野村ビル10階のセコム本社で、松川淳子実行委員長をインタビューに、広報の渡辺喜代美と田中厚子が同席し、セコムからは安田稔広報室長がご参加くださいました。



松川：今回のUIFA日本大会に、色々とお力添えをありがとうございます。はじめに、セコムという会社のことを伺いたいのですが、会社を創られた頃、「安全」という形のないものを商品にすることを、どうして考えつかれたのでしょうか。

飯田：今の会社を始めるまで、僕は形状のあるものを売っていたわけですが。大学を出て勤めていた実家が酒と食品を卸していましたのでね。僕は5人兄弟の末っ子ですから、何とかして独立をしなければと思っていた時に、こういうセキュリティというものをやっている会社がヨーロッパにあるという話を聞いて、それは今までのビジネスと違って、無形のものを売る、日本ではまだ誰もやっていないから、ビジネスのデザインを自由に決められると思ってやり始めたのです。やってみたら、形のないものを売るのはすごく難しい。安全、安心を売るといっても他のものと違って見せる訳にはいかないし、味をみてもらう訳にもいかない。僕をみて下さいと言ったって、僕を見てもちっとも安心そうではない。(笑)大変苦労しましたけれど、10年で少し定着し、20年で安全は買うものだという認識が社会にできてきました。

松川：先例が少ないから、想像力を働かせ自由にデザインできるところが、これでいこうと思われた根拠になったわけですね。

飯田：そうです。それが大きな魅力だったわけです。ですから僕は好んでデザインという言葉を使っています。日本で言われているデザイナーという狭義なものではなくて。

松川：今はだいぶ広義の意味でも使われるようになりましたけれど、「安全をデザインする」というのはとても新鮮ですね。いま、日本中に世紀末らしい不安の種が満ちているように思うのですが、安全、安心を考えるポイントがありますか。

飯田：それは難しい質問ですが、実際に安全であることと、安心感とは別物だと思うのです。実際に安全だと言っても、それで安心感が生まれる訳ではない。勿論実際に安全でなければいけないのですが、これで安心だと思えるようなシステムデザインでなければいけないと思います。見た目にも安心そうで、なおかつ安全であるのがいい。暫く前に、海南島に行ったのですが、家がどれも檻の中に住んでいるような感じで、安心ではないですね。

松川：国によっても安心安全に関して違った哲学があると思います。日本が克服すべきウイークポイントはどんな事でしょうか。

飯田：日本では安全について細かい事を要求されます。アメリカみたいに銃を持っていると、あるところまでは自衛しようと、殺伐たるところがあるのですが、日本は、セコムに頼ればやってくれる、後はお任せよというところがあるもんだから、よりきめ細かにやっていたいかなければいけない。日本で弱いのはいわゆるフィジカルプロテクション（物理的防御）です。これは今まで安全な社会でしたから、弱いのです。これからは、先ずフィジカルに守り、それからコンピューターと通信とを組み合わせなければなりません。この前、尾島先生の1000メートル超超高層ビルの本を読ませて頂きましたが、素晴らしいと思うのは、あの本の考え方は完全にブレイクスルーしていますよ。空間が広く使えて防災上も良いのだといっている。横の動きではなく上下の動きでもって、ビルを町に見立てることができるということで、この本は僕の考え方を非常に弾力化してくれました。

渡辺：高度な技術と、人の介在という両方が大切だと思うのですが。飯田：高度な技術がいくらあっても、そこに人間が介在し心が感じられないと、絶対安心できないですね。今デジタル革命というので、通信や映像は即座に手に入りますが、かさかさした人間社会が構築されそうな気がします。それを補うハイタッチな部分が求められてくると思います。全体的な社会の安全、いわゆる心地よい安全が構築されないとね。

松川：機械やシステムがある程度安全をカバーしてくれる時代に、私はどうすべきかという問題ですが、一つは身体を鍛え銃の練習をするという方向、もう一つは危機管理ができる教養を身につけた優しい人になる方向があると思いますが、どちらを選ぶべきでしょう。

飯田：僕は優しさのほうだと思います。銃には銃を、強さには強さを、というのはあまりクレバーな選択ではないと思います。いくら鍛えたって強い人は大勢いますし、1対5だったらどうするかというもある。みんなが優しさを心がけるような社会になって欲しいと思います。さもなければ高齢化社会をととても守れません。

渡辺：20年も前の話ですが、ボストンに住む友人が泥棒に入られたので、どんな扉にしたら泥棒が入らないかを調べて見たら、いかにも壊れそうな柵が一番良かったというのです。

飯田：怖いから高い扉を作りますが、高い扉が一番危険なのです。中へ入られてしまったら何もわからないですから。扉は低く、中は明るくというのが基本ですね。泥棒が入る家は、何回でも入ります。それはやはり造り方が悪いのです。泥棒は闇が好きですから、外から見られないところが泥棒には安心なのです。

渡辺：コミュニティも互いに見える方が良いと思うのですが。

飯田：見える方が活性化しやすいでしょうね。一番社会が変わってきたのは、お互いに見えないコミュニティになってしまった事でしょう。僕が育ったのは下町ですが、コミュニティがありましたね。そこにはある種の面倒臭さもあります。でもその面倒臭さも人間社会の生活ですからね。だからコミュニティを形成し、心地よい生活を維持する為には、面倒臭さも必要な要因の一つだと思います。

松川：新しい世紀の安全、安心のあり方をどうお考えですか。

飯田：ある側面から切ったら非常に深い問題だと思いますね。教育問題までいってしまうような気がします。防災問題について考えれば、準備をする費用は修復する費用の十分の一ですむわけですから、もっとシステマティックに考えて、何がトリガー（引き金）になると、どのくらいの災害になるのか、分析と対策をしっかりやらなければいけないと思いますね。以前化学工場の爆発が続いた時期に分析をしました。どこがトリガーになったら一番被害が大きいかを調べてもらったら、自分達が想像しているものとは全く違ったものが出てきたのです。だからトリガーを見つける事が大切です。社会全体の安全の為には、徹底的に分析して対策することです。

渡辺：東京のような巨大都市の防災街づくりも、大変難しいですね。飯田：東京の場合、木造家屋は関東大震災の頃より多い訳ですから。化学物質も多くなっている。ですから混合爆発みたいなものを想定すると、爆発数は関東大震災の5倍は越えるだろう。そう考えていくと、今想定している火災数より多くなるのではないかと。そういう元を絶っていくということが必要なのではないかと思います。できるだけ防災上の不安要素を除去していく事が大事です。混合爆発は怖いですよ。

松川：どんなトリガーを絶えば良いと思われませんか。

飯田：都心で直下型の地震が起きた時には、まず人命さえ救助されれば良いと思います。緊急の場合は、司令官の意志一つでどうにも動いてしまいますから、その拠点をどう確保するかを考えておかなければなりません。病院一つとっても、遅れていると思いますね。

渡辺：阪神大震災のとき大きな力を発揮したのは、地域社会に蓄えられた豊かな人間関係だったと言われていますが、21世紀の安全の確保の仕方として、技術と人との両極が重要ですね。

飯田：私共の組織のなかで一番創りにくい部分は、人間の部分です。機械やシステムの開発など、知識部分はともかくとして、なおかつ人の筋肉を鍛えるというのはすごく時間がかかります。組織の筋肉をつくるのに最短でも10年間かかります。私共の持っているリソースのなかで一番大きいのは、長い期間をかけて鍛え上げた組織の筋肉ですね。この前の阪神淡路大地震の時、僕は2日目にヘリコプターで入りましたが、鍛えた筋肉はその時に応じて動きますね。例えばホームセキュリティの多い芦屋あたりでは臨機応変にうちの連中が行動しました。あるところでは、見回り中の社員の目の前で家がつぶれている。うちのお客様だ、というわけで、助け出したお客様の第一声が、「セコム遅い」。最初の救出だったのですが、待つ身になれば「遅い」と言いたくなりますね。また、うちの神戸の本部の建物が幸い無事だったものですから、ヘリコプターで食糧等を60トンくらい送りました。そういう機動性と人間の行動が絡み合って初めて防災の対応ができるという事ではないでしょうか。

渡辺：まさに役所に求められていることですね。

飯田：役所の場合難しいのは、不特定多数ですから。私共のは特定のお客様ですから、優先順位がはっきりしています。

渡辺：特定の人と不特定の人が困っている場合、特定の人へのサービスと、社会的な活動との狭間があると思いますが。

飯田：自然に身体が動いてしまいますね。教育というより、例えばうちの車で走っていたとして、やはり人が見れば助けますね。そういうのが、カルチャーとして組織の中にあります。だから自然に身体が動くと思うのです。

松川：今度の国際会議でも、都市の安全に関わる論文の発表がたくさんあると思います。街づくりに関わる女性が大勢参加しますので、この女性達へのメッセージを伺わせてください。

飯田：これは国際的な会議ですが、特に日本の事を考えれば、少子化、高齢化は避けられない。男はなかなか家の中の事が分からないですから、ビルの問題や住宅の問題を考えるのは女性だと思います。男をさげすむ訳ではありませんが、男の設計士さんが造った家は住みにくいんですね。何軒か造りましたが、ごく普通に造って下さいと言ったにもかかわらず、デザイナーとして力を発揮しようとするから。（笑）これからの高齢化社会の時代は、これでは困ります。それから単純に考えてみて、人口の半分が女性ですから、女性が作った建物が半分なければいけないのですよ。さもないと社会はアンバランスになってしまうような気がします。それで今度、これからの集合住宅を考えようと言うわけで、新しく事業をやろうと思っています。

渡辺：いよいよ女性建築家やプランナーを登場させてやろうと。

飯田：そうです。

松川：私達も、それにお答えできる成果を国際会議でお見せしなければいけませんね。現在セコム社内で女性の活躍は如何でしょうか。

飯田：今までは労働省の規制がありました。だんだん枠が広がってきました。セキュリティの事業の中でも、コントロールセンターの管制員の分野は女性にうってつけです。重要な役割を持つ部分ですが、非常に力を発揮してくれています。それからホームセキュリティの顧客に接するのは殆ど女性ですね。うちは今まで女性が多くなかったのです。僕は基本的に、半分は女性と考えているのですが、なかなかそうは進みません。

松川：建築や都市計画の仕事には経験によってカバーできる部分がかなりありますので、女性のメリットは大きいと思います。

飯田：病院の建築ではドクターの意見を聞きますが、本当はナースの意見の方が重要なのですよ。うちの得意分野である在宅医療、在宅介護を絡ませた集合住宅を造りたいと考えています。

松川：どんな集合住宅ができるか楽しみです。女性の起用もぜひ積極的をお願いします。そして私たちの国際会議にも、期待してください。今日はお忙しいところをお時間頂きましてありがとうございました。（記録・写真担当：田中）

飯田 亮：

セコム株式会社 創業者、取締役最高顧問

松川淳子：

UIFA第12回日本大会実行委員長、
株式会社生活構造研究所長

■U I F A第12回日本大会への参加

「環境共生時代」=「エコロジ的危機の時代」の都市・建築・空間

六反田千恵

人種主義、男根中心主義、近代적であろうとした都市計画のもたらした破綻、あるいは市場システムから解放された芸術的創造、教育と社会をむすぶ社会的調停者を生み出すことのできる教育といったような一見異質の諸問題を、ひとつの同じ倫理-政治的照準が貫



通している。このような問題の定め方は、つまるところ、新しい歴史的な脈のなかにおける人間存在の生産はいかにあるべきかという観点に帰着する。

フェリックス・ガタリ「3つのエコロジー」
訳：杉村昌昭、大村書店、1991

ガタリは21世紀を目前に亡くなってしまったが、この「3つのエコロジー」というエッセイ集は、まだまだ有効な示唆を多く含んでいる。ガタリは言う、地球規模での環境問題の噴出、世界中を覆い尽くしたかに見える資本主義経済体制の矛盾と領域の再編・民族問題の激化、先進諸国を覆う社会の高齢化、地域社会の荒廃、家族の崩壊など、一見ばらばらに現象しているこれらの危機的状況は、人類史上のひとつの過程である「現在」におけるエコロジ的バランスの崩壊のさまざまな現象形態である、と。ガタリは「エコロジー」という言葉を最大限包括的な概念として機能させている。

ガタリの定義によれば「エコロジー」とは、単に「自然環境のエコロジー」のみを指すのではない。「自然環境のエコロジー」と「社会的エコロジー（社会的諸関係の総体）」と「精神的エコロジー（人間の主観性）」とを包括する概念である。危機のさまざまな現象は深い相互連関生の中にあり、根本的にエコロジ的バランスを回復することが必要なのである。

エコロジ的バランスの回復は、人類全体の生存様式から人間集団の《ターミナル》である個人の主観性にまで関わる課題である。地球規模のインターナショナルな課題であると同時に、国家や民族や都市、地域社会-コミュニティや家族という人間集団の課題でもあり、最終的には個人の実存におけるパーソナルな課題でもある。それは同時代に生きる人々の生活様式、集団的生存様式を根本的に考え直すことを要請する。

「環境共生時代」は「エコロジ的危機の時代」と同義である。私たちの身近にある建築や都市に引き寄せて言えば、都市や建築その空間構成は、そこに生きる人たちの集団的生存様式の形象そのものである。例えば、ひとつの建売住宅でもその社会の集団的生存様式の形象である。あるいは「まちづくり」とは都市を集団的生存様式の問題として捉えようとする概念である。そこで「まち」は、人間集団の《ターミナル》である個人の実存と、都市という抽象的集団のインターフェイスとなる実存的集団を指している。

「環境共生」を考えることは、人間や社会の諸関係の中で都市や建築を根本的に考え直すことである。ガタリの遺言ともいえる「集団的生存様式の再構築」に向け、少しずつであっても前進していきたい。

(共栄学園短期大学 住居学科)

U I F Aの行方

頼あゆみ

今回、このような場を与えていただきましたが、実は、私はU I F Aの会員でないばかりか、建築家でもプランナーでもありません。専門はと問われれば、学校では法律を勉強しましたとお答えします。その私が、第12回日本大会の実行委員に名を連ねさせていただいているのは、建設省の事務官という職業柄ご縁のあった方の多くがU I F Aの関係者であったことによります。



また、かつて松川実行委員長とパリに出張する機会があり、その際、ド・ラ・トゥール会長には大変お世話になりました。その一飯その他の恩に報いる意味もあり、お声をかけていただいたときには、対建設省渉外担当以上に何ができるかという不安を抱きつつも、喜んでお引き受けしました。

私の中途半端な立場にも、少しは利点があります。会員でも、建築家でもない私には、U I F Aの活動、あるいは第12回大会の日本開催について、少し突き放した見方ができるということです。

総務・財務担当部会はいわゆるロジ担当ですから、サブ担当で吟味された大会の中身を外向けに料理するのが仕事の一つです。その中で気になったいくつかの課題について触れさせていただきます。

一口に外向けといっても、様々な対象が想定されます。例えば、各国からの参加者に対しては、日本らしさが出ているかどうか。日本国内の参加者に対しては、テーマが魅力的であるかどうか。支援者に対しては、U I F A独自の成果をあげることができるかどうか。

特に財政的な支援については、道楽で協力して下さるものではありませんから、U I F Aの世界大会に対して、何らかの社会的貢献、個々の企業にとってのメリットを期待するのが当然です。女性が集まるだけで何かが変わるという時代でもありませんし、表だってはともかくとして、今更ウーマンリブでもないだろうという批判的見方があるのも事実ですから、なおさら成果が求められます。

これは今大会に限ったことではなく、U I F Aという組織が社会に対してどう関わっていくのかという課題につながります。

現在掲げられているU I F Aの目的としては、会員の活動を支援するとともに友好関係を築くこととなっています。もしU I F Aが会員のためだけの友好団体であるならば、世界大会も会費と参加費だけで運営すればよいのです。外の世界からの支援を求めるといことは、U I F A自身にも、積極的に外に貢献していく役割が求められるということだと思います。今回、横浜で予定されている公開シンポジウムについては、こうした関わり方を模索する一方向として楽しみにしています。第12回大会のテーマは、「環境共生時代の人・建築・都市-21世紀における新しい調和的関係を模索しながら-」であり、社会との関わりなしに成り立つものではありません。

U I F A日本支部が、この日本大会を契機にして、外向けに発信していく団体に、ひいては政策提言をしていくような圧力団体に成長していくことを、私は密かに期待しているのです。

(国土庁 計画・調整局 総務課)

古居みつ子

折角の機会ですので、大会で披露される試みや取り組み、レポート、関係者の方々と交流を、自分のテーマでもあります「共生の住まい」をキーワード、組み立て・編集できたらと思っています。



共生の時代は、様々なスタイルの生き方が、可能な、或いは今まではハードルの高かった生き方を可能にしていく時代です。一人一人の個性が発揮され、社会還元されなくてはならない時代でもあるでしょう。

血縁家族を中心とした住まいづくりから、それだけではない地縁・知縁に軸足を少しかけた住まいづくりや、その実現をするために行なわれた・行なわれている海外での様々な試みが披露されることを期待しています。またそのことを通じて、関係者の交流が深まる機会を持てることも楽しみです。

どう住まい手が生き方と重ね合せながら建物を使いこなしているか、或いはその支援体制も焦点にあてることができると、更にのり多いものになっていくような気がします。そんなセッションが組まれましたら、是非参加させていただきたいと思っています。

また、超個人的なことですが、何年前かに、アメリカのウイシコンシン州で出会い、いろいろとご紹介していただいたWDCのメンバーが来てくれたら楽しみだなとか、海外でお世話になったけれども、その後お便りも跡絶えたままになってしまっている建築関係の方々とかに、ひょっとした会議の場でお会いできるのではないかという期待もあります。

あまりグローバルな動きをしていないし又、苦手な者ですので、いろんな働き方、試みをなされておられる方々から刺激を受け、交流できる機会にすることができたらと思っています。

もし、パネル展示する機会と私自身の物理的な余裕がありましたら、今、オーナー及び地域の方々と共に取り組んでいます小規模なグループハウスづくりの画を出したいと思っています。そのためにも、事業実現に向けて邁進しないといけないので、自分に打ちつことになりかねないのです……。

それに関心を持って下さる参加者がいらしたら、建築のこと、住み手のこと、そこで生活スタイルのこと、支援体制のこと、居住者とおしの関係等々……意見交換してみたいですね。

住宅を生み出す国のシステムは異なるでしょうが、共通する部分も多いにあるものと思います。

話題はたくさんありそうです。

今から語学力に磨きをかけないと、折角の機会を失いそうです。

(尙) 夢工房

■バンコックにて (2)

柏原 雪子

1月というと例年なら少しは涼しくなるそうですが、今年は暖冬だとか。毎日30度を超えてしまいます。先日ドイツに住んでいる甥が避寒に来ましたが、あちらは-15度だそうで無事職場に復帰できたか心配しています。

さて、今回はタイの食事情についてお伝えすることにします。

(2) タイの食事情

バンコックはとても歩きづらい街です。暑いこと、歩道が凸凹なこともあります。もう1つの原因は屋台にあります。屋台が歩道を占拠しており、人は車道を……ということがしばしばです。

まず早朝、まだ陽の昇る前。4時か5時頃頑張って早起きすると、もうあちこちにお粥の屋台が。お客はあやさん(メイドさん)、運転手さん達。これは彼らだけのための屋台です。

午前7時を過ぎると屋台も客も入れ替わります。今度のお客さんは通勤・通学客。料理の内容もバーミーナム(汁そば)、ガイヤー(鶏の炭火焼き)、ソムタム(青パパイヤのサラダ)、鶏がらスープぶっかけご飯(鶏がらスープで炊いたご飯におかずを載せたもの)等バラエティに富んでいます。タイ人はとてもグルメです。どの屋台も実演販売なので舌だけでなく目も楽しませてくれます。一品25~30バーツ(60~70円)と安いのも魅力。ただしお皿をちゃんと洗わないので、お腹に自信のある人向きでしょう。

12時は昼食。屋台に入りきれない人の為にはテイクアウトもあります。料理や飲み物をビニール袋に入れて輪ゴムで器用に止めてくれます。会社の休憩室で昼食を食べるもの一般的な食事法です。

3時はおやつ。おやつは10~15バーツ。果物は西瓜、パイナップル、マンゴー、パパイヤ、マンゴスチン、ドリアン、ジャックフルーツ、チョンブー等々、キリがありません。アイスクリームはトッピングに豆やコーンが乗っている不思議な食べ物です。

7時から夕食。歩道上にはテントが張られ、照明、テーブルや椅子、さらにはBGMまで登場します。タイの人達は家族連れでここで夕食を摂って自宅へ帰ります。

こう書くと如何にも無法地帯のようですが、屋台は市当局公認の商売です。月に何かかのショバ代を払うと営業許可が下り、電気等も使用できます。ただし、水曜日は掃除のため屋台はお休み。みんな何処で食事をするのでしょうか。

このようにタイや香港等では夫婦共働きが常識であり、家で料理をする習慣がありません。多くの人が屋台で食事を済ませます。歩道は言わばタイの台所なのです。とは言え環境・美化の観点から見ると屋台がタイのウィークポイントであることも否めない事実です。最新のデパートやオフィスビルでは、これらの屋台を食堂としてビル内部に取り込むことによりこの問題を解決しています。タイの街の屋台が消え行く運命にあることもまた間違いのないようです。



(UIFA JAPON会員、在バンコック)

■ドキュメント6 ー第12回UIFA日本大会に向けてー

(1997年11月12日～1997年12月20日)

11月12日 (株)日本建築学会へ「市民公開シンポジウム(横浜)」の共催費の助成申請書提出。

11月15日(11時～2時)第10回実行委員会、カムライフテリ7館。15名。プログラム部会展示パネルの形式、送付先、保管場所等検討。おもてなし部会(11/14) ホームステイ受入れのお願い発送。広報部会2nd. サーキュラー細部検討。デザイン部会2nd. サーキュラー表紙最終案提出。コンgress・バッグの検討。ポスター等コストの見直し検討。

11月21日 日経新聞夕刊に、サイマル・インターナショナル負債90億で和議申請の記事掲載。

11月25日 和議申請に関して、サイマル担当者が総務・財務部会に出席、サイマルの当面の意向を説明。

12月16日 セコム株式会社より研究助成許可される。

12月19日 勸東京都女性財団へ助成金申請提出。

12月20日(1時～2時)第11回実行委員会、カムライフテリ7館。31名。総務部会サイマルの件、サイマルに代わるP.C.Oの選定等の経過報告及び提案。2nd. サーキュラーに関する日本語原稿完了。翻訳方法・見積り等の検討。印刷会社の選択。発送先リストデータ化、発送の期日。寄付・助成金関係の依頼準備及び申請について。会計体制及び口座体制の件。協賛団体のリスト等。開催概要作成。広告掲載の依頼状の作成。プログラム部会(10/30) パークタワー展示会パーティ打合せ。(11/11) パークタワーホール作品展示打合せ。(12/7) 第9回部会スタディツア(墨田区・世田谷区)実施案作成。おもてなし部会(12/12) 国立オリンピック青少年総合センターにて会議中のコーヒープレイクに関する打合せ。(12/14) ホームステイ受入者リスト作成。ポストコンgressツア(京都・奈良・神戸)案作成。スタディツア東京コース案作成。広報部会2nd. サーキュラー発送用封筒(A5版)作成。報道活動の準備。広報部会の応援者募集。デザイン部会2nd. サーキュラーの表紙デザイン決定。

■役員会の報告

第8回役員会(97年11月20日6時30分～)役員10名出席。

第9回役員会(97年12月20日1時～2時)役員11名出席。

■日本大会のテーマについての勉強会

UIFA日本大会のテーマに沿って、大会の前に共通認識を持つために会員の皆様と共に学び、語り合う会を計画しています。大会のテーマの3項目を取り上げて3回、総合的な環境全体を考えるテーマで1回、の計4回開催する予定です。

3月 都市と環境 講師:都市計画家 ジルク・フォクトさん

5月 人と環境

6月 UIFA JAPON総会における記念講演会

環境共生時代の人・建築・都市(案)

講師:滋賀県立大学環境学部 林 照男 教授

7月 建築と環境

現在、5月と7月の会の講師については、交渉中です。

■企業広告掲載の募集

UIFA第12回日本大会に配付される発表内容の予稿集及び、コンgressバック(約500部)に掲載する企業広告を募集しています。

日本の建築、環境、インテリア等に関連する企業を対象に、予稿集では5段階の大きさ(A4版(1)見開き頁、(2)1頁、(3)1/2頁、(4)1/3頁、(5)1/8頁)、コンgressバックは、40mm×40mm/カ所、20ヶ所の6種類を設定し、その募集要項をまとめた「広告掲載のお願い」のパンフレットが用意されています。

広告掲載が可能な企業の心当りのある方は下記へご連絡下さい。

第12回日本大会実行委員会 総務部会担当 山本基親代

連絡先 (有)敏設計 TEL. 0424(35)2351/FAX. 0424(33)3160

■UIFA第12回日本大会参加予定国の紹介

現在、世界のおよそ30ヶ国から、日本大会への参加希望が届いています。国際会議の場で、社会・経済状況や文化などの異なる国の方々と共通のテーマのもと議論し、情報交換し、交流を深めることは、私たちに多くの成果を期待させるものです。そしてより確実に、意義あるものとするために、参加各国に関する知識と理解を持つことは重要なことです。NEWSLETTERでは、参加国(NEWSLETTERNo.26参照)の紹介、関連の資料や情報の提供及び、各国の事情通の方、出身者の紹介、紹介記事等会員皆様からの情報提供を求めています。

■No.26号の記事で、英会話の先生はキャサリン・パウエルさんの間違いでした。訂正して、お詫びいたします。

■広報だより

立春を迎え UIFA JAPONも、来る9月開催のUIFA第12回日本大会に向け2nd. サーキュラーの世界に向けての発送、東京、横浜での2回の記者発表会。多くの人々の歓心と期待の中での準備活動は次のステージへ。その中で“UIFAの行方”と題する頼さんの文章は、これからの準備のあり方、そしてその心構えについて、いみじくもすばりと語られているのが印象的でした。

担当: 飯島、川嶋、渡辺、田中、大高、(柏原)